パウロの
ガラテヤ人への手紙

語り直し、
解き明かし、
今日のために。

GOOD NEWS

パウロのガラテヤ人への手紙

語り直し、解き明かし、今日のために。

Hans-Jörg Ronsdorf

子があなたがたを自由にするなら、そのときだけ、あなたがたは本当に自由になります。

ヨハネの福音書8章36節

本書について

ガラテヤ人への手紙を自分の言葉で言い換え、つまり説明を加えながら語り直しました。分量は、古典的な聖書翻訳における元の聖書本文の、およそ三倍の長さにあたります。

2020年4月 第1版

© Hans-Jörg Ronsdorf――無断転載を禁じます。

Albis 6 ½

87477 Sulzberg

hj-ronsdorf@t-online.de

www.hans-joerg-ronsdorf.de

ドイツ語版のISBN 978-3-9820715-3-4

表紙デザイン：トビアス・シュトリッカー（Tobias Stricker）

はじめに

あなたが手にしておられるのは、パウロのガラテヤ人への手紙の**説明的な語り直し**です。著者である私は、手紙の書き手の立場に身を置き、その思いを説明しながら、それゆえ少し詳しく書き記そうと試みています。私のテキストは、元の本文のおよそ三倍の長さです。言い換えれば、もし私が誰かにこの手紙を、あるいは一節一節を短く的確に説明するとしたら、それがまさに、あなたがここで読まれるものなのです。

これによって、あなたがこの手紙のメッセージをよりよく理解し、ご自分の生活とのつながりを見いだしてくださることを願っています。それこそが大切なことだからです。私のテキストは、パウロの手紙の原文とはまったく違って、神のことばではありません。原文は、あなたご自身が聖書で読むことも、私のテキストと並べて読むこともできます。

ですから、序論を読まれる前に、ここで一つお願いがあります——**どうか聖書を手に取り、まずそこでこの手紙を一度、最初から最後まで通して読んでください**。声に出して読むと助けになります。わからないところがあっても、そのまま読み進めてください。そうすれば第一印象が得られますし、記憶を新たにすることもできます。きっとおわかりになるでしょうが、ガラテヤ人への手紙——もしかするとパウロの最初の、最も古い手紙——は、とても美しい手紙です。それは福音の最も深い弦に触れ、その響きを広げていきます。**これはクリスチャンだけでなく、ユダヤ人やイスラム教徒にも語りかける手紙です。宗教間の対話において、福音とは何か、そして福音がほかのすべての宗教とどこが違うのかを示す助けとなります。**

何が起こったのか

新約聖書の手紙の多くには、書かれたきっかけがあります。この手紙もそうです。

少しの間、使徒であり宣教者であるパウロの立場に身を置いてみてください。彼は同労者とともに、険しい道をたどってタウルス山脈を越え、アナトリア（トルコ）の山々を歩いて旅していました。疲れ果てた彼は、そこでガラテヤ地方の人々に出会い、彼らのために十字架で死なれたキリストを宣べ伝えます。この人々は——パウロとは違って——ユダヤ人ではありません。もしかすると、彼らはユダヤ人のことも、その風俗や習慣のことも知っていたかもしれません。彼ら自身はさまざまな偶像を拝んでいて、唯一のまことの神を知りません。福音のメッセージはこの人々の心を射抜き、彼らは立ち返り、悔い改め、イエス・キリストへの生きた信仰に至ります。この信仰は生きています。それは、すべての弟子たちの交わりの中での新しい生活によって目に見えるものとなります。

しばらくして、次のようなことが起こりました——パウロはとうに次の地へ旅立っていました。そこへ、ユダヤ人クリスチャンの教師たち（**ユダヤ主義者**）がこのクリスチャンたちのところにやって来て、こう要求したのです——「あなたがたが本当に神の民に属したいなら、アブラハムの子孫となり、彼への約束を受け継ぐ者になりたいなら、あとはただ**割礼**を受けさえすればよいのだ」（いわばユダヤ人になるということです）。割礼は、アブラハム以来、すべてのイスラエル人がこの契約とその祝福と義務に属するために欠かせない、契約のしるしでした。

このユダヤ人クリスチャンの教師たち（ユダヤ主義者）は何を教えたのか

このクリスチャンのユダヤ人たちは、キリストを拒んだわけではありません。けれどもパウロと**彼の福音**は拒みました。また彼らは、律法の良い行いによって神の前に義と認められる、と教えたのでもありません。彼らが教えたのは、**割礼を受けて初めて、本当に神の民に属する**ということでした。

そうすれば互いの社会的な付き合い（つまりユダヤ人と異邦人クリスチャンとの付き合い）も楽になる、というのです。ユダヤ人は異邦人、つまり割礼を受けていない人とは、同じ食卓で食事をしませんでした。それはモーセの戒めではなく、あとから付け加えられた、人間的な、ユダヤ主義の戒めだったのですが。

このユダヤ主義者たちは、キリストの到来とともにモーセの律法の時代が終わったことを、悟ることができず、また悟ろうともしませんでした。彼らは、神はアブラハムへの約束を広めるために、ただユダヤ民族を通してのみ働かれる、と考えていました。それに対するパウロの論点はこうです――**神の救いのご計画の中で、律法は今やその目的を果たした**のであり、だから律法を守り続けるのは誤りです。そして異邦人に律法を受け入れるよう求めるのも誤りです。神が今もなお民族主義的なやり方で、つまりイスラエルを通して働いておられる、と信じるのは誤りです。神の民は今や、あらゆる国の人々から成っているのです。

少なくとも三つの理由から、パウロはユダヤ主義者たちとその教えを断罪します――（1）彼らは**キリストの贖いのみわざが完全に十分であり、すべての人に及ぶ**ことを理解していませんでした。（2）彼らは、キリストと御霊が、モーセの律法とその民族的な性格をはるかに超えていることを理解していませんでした。（3）そして彼らは、神がすべての信じる者（ユダヤ人にも異邦人にも）に聖霊を与えてくださることに気づいていませんでした。その結果、クリスチャンは律法によって導かれる必要がありません。その代わり

に彼らには御霊がおられ、御霊は道徳的な律法（たとえば十戒、ただし安息日の戒めは除く）にかなう仕方で彼らを導かれます。そして律法を満たしもします――けれども律法を目標とはしていません。**御霊の導きは、人をモーセの律法へと連れ戻すのではなく、キリストの律法と神の御霊が新しい創造の生活の規範となる、そのような生き方へと導くのです。**

ユダヤ教の朝の祈りの一つが、（一部の）ユダヤ人の自己理解を示しています。

私を異邦人としてお造りに**ならなかった**永遠なる方、私たちの神、世界の王よ、あなたはほむべき方です。私を奴隷としてお造りに**ならなかった**永遠なる方、私たちの神、世界の王よ、あなたはほむべき方です。私を女としてお造りに**ならなかった**永遠なる方、私たちの神、世界の王よ、あなたはほむべき方です。

これは民族的な誇りであり、社会的な地位であり、性別による差別です。この手紙から学ぶことができるとおり、パウロはこれに対して徹底的に立ち向かいます。

何がパウロをこれほど動揺させたのか

ほかのどの手紙でも、パウロはこれほど徹底して、このユダヤ主義の律法教師たちを論駁し、断罪してはいません。**ガラテヤの人々は、福音の真理と比類のなさが投げ捨てられつつあることに気づいていませんでした。**彼らはキリストを手放すつもりはありませんでしたが、モーセと割礼も必要だと吹き込まれたのです。そうすれば本当にアブラハムの子となり、選ばれた神の民に属することになる、と。

ガラテヤの人々が**イエスにモーセを加える**ことを選んだことによって、ユダヤ主義者たちは、そもそも私たちがキリストを必要とするという必然性そのものを壊してしまいます。パウロははっきりと言います――「もし義が律法によって得られるのなら、キリストは無駄に死なれたことになります」（2:21）、そして「もしあなたがたが割礼を受けるなら、キリストはあなたがたにとって何の価値もないものになります」（5:2）。御霊における神の力を否定することについて、パウロはこう言います――「あなたがたが御霊に導かれるなら、律法の下にはいません」（5:18）。つまり、御霊を選ぶ人は律法を必要とせず、イエスを選ぶ人はモーセを選ばない、ということです。両方を持つことはできません。パウロのメッセージは妥協を許しません――**キリストだけ**です。

パウロが断罪するのはどのような律法か

モーセの律法、つまりトーラーについて言えば、それが聖なるもの、良いものであることを、しっかり確認しておくことが大切です。そこには十戒だけが含まれるのではありません。全体としてはモーセの五書すべてに及びます。イスラエルの周辺の諸民族と比べると、それは道徳的・倫理的に比類なく、際立っています。今日に至るまで。私たちのドイツの基本法にさえ、その良い影響を見て取ることができます。パウロが律法を、そしてそれを行おうとするあらゆる努力を断罪することなど、決してありません。律法は、神がご自分の民イスラエルに与えられたすばらしい賜物です。パウロもそれを守っていました。知らずに律法に違反してしまったときには、モーセの律法のいけにえの奉仕が赦しをもたらすことができました。

パリサイ人は律法に人間の戒めを付け加え、手を洗うことに至るまで、できるかぎり多くの生活の領域を敬虔に規定しようとしました。この義務を、彼らは自分自身と人々に負わせたのです。彼らはイエスの時代のユダヤ教の一派で、律法をとても真剣に受け止めていました――そして、すべてのユダヤ人がそうであることを願っていました。一種の敬虔運動です。パウロ自身もかつてはその一人でした。キリストが彼の人生に入って来られるまでは、熱心な者でした。イエスが彼らを見抜いておられたので、彼らはイエスとの間に問題を抱えていました。イエスは**人間の戒め**を厳しく非難されました。そして、**神と隣人を愛する**という大いなる戒めをないがしろにしていることも。これらの最も大切な戒めが置き去りにされていたのです。イエスがパリサイ人とその律法主義についてどう考えておられたかは、マタイの福音書23章で読むことができます。

ガラテヤ人への手紙における律法主義（リーガリズム）とは、神に喜ばれるためにモーセの律法に固執することです。しかしそれは、単に規則にこだわることだと理解してはなりません。この律法主義の誤りは、**それがキリストと御霊を押しのけてしまう**点にあります。それが誤っているのは、(1) キリ

ストにおいて、また御霊によって、モーセの律法が成就し、それによって最終的に過去のものとなったことを理解していないからです。さらに誤っているのは、(2) ユダヤ主義者たちが**異邦人にユダヤ人になるよう強いている**（割礼によって）ことです。その意味で、パウロは、このユダヤ主義者たちが主張する、律法についての聖書的でない見方と、その民族主義的な表れを攻撃しているのです。

律法の行いとは何か

それはユダヤ主義者たちの振る舞いや取り組みのことで、一方ではモーセの律法と一致しています。けれども、キリストの贖いのみわざと御霊の導きが日々の生活にとって不十分だと主張したことは、誤りでした。

「律法の行い」とは、今やキリストと御霊によって押しのけられた律法が命じる行為のことです。「律法の行い」とはさらに、ユダヤ人と非ユダヤ人の間に境界線を築くユダヤ教の慣習のことです。神の律法は、人を隔てる社会的な境界線に焦点を当ててはいません。むしろそこに、すべての人に対して明らかにされた神のみこころを見ることができるでしょう。

今日の律法主義

ケルト人（ガラテヤ人）の問題を、**そのまま一対一で**、2000年後の私たちの時代と文化に移し替えることはできません。けれども、今日の私たちへの教訓はあります。問いはこうです。どうすれば私たちは神の栄光のために生きることができるのでしょうか。モーセの律法や十戒が、そのために助けとなるのではないでしょうか。

ガラテヤ人への手紙の答えはこうです。**私たちのうちにおられるキリスト**と**私たちのうちにおられる神の御霊**が、「**御霊の実**」を生み出します。私たちの日常生活の中で。それが**キリストの律法**にかなうことなのです。

多くのクリスチャンの内側では、思いと感情の中で、自由に与えられた恵みから業績を上げようとするモードへと移っていく仕組みが働いています――彼らはもっと神を恐れる者になりたい、神にもっと近づきたいと願います。活動することが自分を力づけ、自分のためになると感じます。けれどもその際、それが自分自身の業績と義務の遂行であり、それが見せかけの聖さや霊性の感覚を与えているだけだ、という欺きに気づかないのです。けれども私たちは、キリストにあってすべてを持ち、すべてなのです――そしてキリストが私たちのうちにおられます。それに付け加えられるものは何もありません。

律法主義をどのように見分ければよいのでしょうか。私たちが目を留めるべきなのは、**福音の中心的な主張――キリストとその贖いのみわざが完全に十分であること、そして共に生きる私たちの日常にとって聖霊が中心であること――をないがしろにする**慣習、態度、要求、規定、神学的見解です。

それは、私たちの教会の中で、自分の気に入らない不快な規則や拘束力のある規定を、ただ探し出すということではありません。規則は実際、霊的な成長にとって良いものでありえます。良い規則や習慣という意味で理解され、実践される「律法的なこと」は、それ自体悪いものではありません。ですから、この言葉は慎重に使わなければなりません。あるクリスチャンが定期的

に聖書を読み、定期的に祈り、定期的に礼拝に出席するとしても、それはパリサイ人やガラテヤのユダヤ主義者たちの律法主義ではないからです。神の国における規律は有益であり、しばしば必要です。けれども、中には紙一重のこともあります。もし私がこうしたことを行うのは、そうすればクリスチャンの間で重んじられ、神からより多く愛され、ひいきされていると思えるから、というのであれば、私は宗教的な形式主義の罠に陥っています。多くの良いことが律法主義になりえます。心から出たものではない、外側の形として。神への愛から出たものではない形として。良い霊的な習慣は、クリスチャン生活の確かな一部であり、律法主義ではありません。けれども、律法主義になってしまうことはありえます。

この手紙は今日の私たちに何を教えるのか

主イエス・キリストの足跡に従う私たちの歩みは、**信仰**によるものです。父への信頼によるものです。イエスの手にしっかりとつかまっている子どものように。

私たちは献身していても、自分の力で善を行う**力がない**ことを自覚しています。クリスチャンとしても、いや、クリスチャンとしてこそです。ですから私たちは、自分を宗教的な業績のプレッシャーの下に置きません。私たちは取り繕いません。偽善は律法主義の兄弟です。私たちは自分自身に対しても、他の人に対しても、そして私たちの心をご存じの神に対しても正直です。神は、私たちが神を愛していることをご存じです。イエスの最もつらい時に完全に失敗してしまった、かつてのペテロのように。それでも、過ちや失敗があったとしても、ペテロはイエスを愛していました。ですから、私たちは**聖化のストレス**を自分の生活に入り込ませません。それは高慢や絶望、失敗への恐れの温床です。私たちは自由の中に、恵みの中に生きています。**私たちは、あらゆる過ちとともに、あらゆる弱さとともに、そう、私たちが犯すあらゆる罪とともに、永遠に受け入れられています。私たちは、私たちの罪のために死んでくださったキリストのものだからです。**

神が私たちに与えてくださるすべてのものは、私たちの忠実さや業績や決意に対する神の報いではありません。私たちはすべてを――神の子ども一人ひとりが――信仰によって受け、経験し、楽しみ、達成するのです。私たちの神への、子どものような、ほとんど盲目的なまでの信頼によってです。信仰は神の心を動かします。それこそが神にとって大切なことなのです。こうして私たちは神に栄光を帰します。「私たちに必要なのはイエスと御霊だけ。ほかには何もいらない」と言い表す信仰です。

神の無条件の受け入れの中で娘として、息子として生きることは、自由を意味します。自由の中で私たちは成熟していきます。良い実が目に見えるようになります。**キリストが私たちのうちに形づくられていきます。**

宗教的、またクリスチャンの律法主義の例

今の時代の例を挙げてみるのは、いつも興味深いことです。律法主義には実にさまざまな現れ方があるからです。高濃度のものもあれば、わずかに残っているものもあります。個人の生活にも、共同の生活にも。

私が出会った中で最も目立ち、最も広まっている律法主義は、良い行いによって救いを得ようとするところにありました。けれども私たちは、功績によって救いを受けるのではなく、人間の仲介や秘跡によって受けるのでもありません。ただキリストによってのみ、救いを受けるのです。

ガラテヤ人への手紙では、神の誉れとなるような生き方をするために律法主義が選ばれる、ということも問題になっています。そして、神の民に属したいならそうするのがふさわしい、という生き方のために。この種の律法主義も、最初のものと同じように、パウロによって退けられます。私が挙げる例は、そうしようと思えば誤解することもできるでしょう。

例：聖書を読んだり祈りの時間を持ったりすることが、ほとんど、あるいはまったくできないとき。デボーションの時間がたびたびなくなってしまうとき。意図せずに、あるいは怠慢から。そうすると罪責感が湧いてくることがあります。自分には罪がある、ふさわしくない、と感じます。自分は失敗者だと感じます。けれどもそれは、私たちがキリストにあって息子、娘として無条件に受け入れられていることを、まだ理解していないということを示しています。父とのこの関係は揺るぎません。いつでも！私たちはどんなときにも愛され、100パーセント受け入れられています。もちろん、聖書を読むことと祈ることは大切です。けれども最初の数世紀のクリスチャンの多くは聖書を持っていませんでしたが、それでも彼らはイエスの力ある証人であり、その信仰は聖霊の力のうちに、愛を通して働いていたのです。

例：リバイバル、癒やし、奇跡、恍惚体験、異言、特別な祈りの体験など、聖霊における超自然的な体験があります。そのようなことを体験した人が、その後しばらく何も体験しなくなったとしても、だから今は前より愛されて

いないのだ、と結論づけてはなりません。こうした体験は、自分がより多く、あるいはより少なく愛されていることの証明には決してなりません。体験がなくなっても、私たちと神との関係は何も変わりません。その理由を探してもかまいませんが、決してそのことで絶望すべきではありません。**私たちは信仰によって生きているのであって、見ることや体験によってではありません。**

「完全な」クリスチャン、「本物の」クリスチャンになるために、こういう体験や認識が必要だと、誰もクリスチャンに押しつけてはなりません（たとえば御霊のバプテスマや異言）。「忠実な」クリスチャンであるためには主の晩餐をこう理解し、こう行わなければならない、と誰も命じてはなりません。同じように、髪型や服装の規範、礼拝の式次第、座席の決まりを押しつけることも、誰にも許されていません。この世から分離しているために政治に関してどう振る舞うべきか、ということで、クリスチャンに圧力をかけることも誰にも許されていません。聖書の指示の枠内には、大きな自由があります。何が許され、何が許されないかについて視野を狭めたり、びくびくしたりすることはすべて、律法的で弱い信仰の表れであり、神の息子、娘たちの十分な成熟にふさわしくありません。

こうしたことが、互いに交わりを拒む理由になってしまうなら――パンを裂くことにおいてもそうなら――それはパリサイ的、ユダヤ主義的な律法主義です。**ある人たちは内側にいて、ほかの人たちは外にいる。**ガラテヤ人への手紙が力強く訴えている一致（3:28）を思えば、これはスキャンダルです。

他の人を裁き、失格とみなす裁きの霊は、まさにユダヤ主義者たちの態度そのものです。彼らはこう言いました。「割礼を受けていれば、あなたは仲間であり、すべてはそれでよい」（律法がそのほかに何を言っていようと、どうでもよかったのです）。人間の形式や式文を守ることが、生きている敬虔のすべてであるなら、それは人と神の前での偽善に堕してしまいます。

多くの取り組みは、キリストにあるいのちと、御霊の喜びと自由に逆らったり、それを消してしまったりしないかぎり、良いものです。

今日、律法主義はもはやほとんど話題になりません。むしろ問題なのはその反動、つまりもはや守るべきものは何もなく、自由が、責任感のない自己中心的で個人主義的な生き方に行き着いてしまうことです。こうして自由は誤解され、危険なものになります。私たちが反対側から馬から落ちてしまうことのないように、パウロはこの手紙の中でそのことを指摘するでしょう。

最後に：いいえ、私たちクリスチャンは、よく言われるように、感謝の心から律法を行うのでもありません。事実はこうです――ローマ人への手紙8章4節が示すとおり、キリストに従い、御霊に導かれている人々は、成熟した神の子として、律法の道徳的な要求をごく自然に満たすのです。神の律法と御霊の働きが、どうして互いに矛盾するでしょうか。けれども彼らが道徳的な律法を満たすのは、それが彼らの規準だからではなく、御霊とキリストが彼らのうちに生きておられるからです。**モーセの律法の時代は永遠に過ぎ去りました。今やキリストの律法こそが、御霊に導かれる生き方の真髄なのです。**

律法からの自由は、どう生きてもかまわないという**「安価な恵み」**を助長するものではありません。自由は、何をしてもよいという許可証ではありません。自由は私たちを育て、また私たちに求めます。自由と恵みは私たちに責任を負わせます。神の御霊は神秘的な仕方で私たちのうちに実を結ばせてくださり、私たちは感謝しつつ、自分でもその実に驚いてよいのです。それは他人に支配されることではなく、新しいいのちにおける自己決定です。それが私たちのうちにおられるキリストです。それは子としての身分を与える御霊であり、この御霊が私たちのうちで、私たちの内側から父に向かって語られるのです――アバ、お父ちゃん、父よ！

ガラテヤ人への手紙――キリスト者の自由と福音のマグナ・カルタ

パウロが神から啓示によって受けた福音は、キリストにある救い、義認、無罪の宣告を、すべての人にもたらします。そして、生きるための力として聖霊の賜物をもたらします。神の息子、娘とされた人々は、愛と御霊の実の中に目に見えるものとなる信仰によって、自由の中に生きるのです。

大切なのは、キリストが御霊によって私たちの生活を、責任ある自由と、仕える献身へと造り変え、律法の厳しい要求（と人間による付け加え）がはるかに超えられていくようにしてくださることです。

これによって、モーセの律法も、割礼も、約束の唯一の担い手であり祝福の唯一の仲介者としてのイスラエルの民族的アイデンティティも、過去のものとなりました。これらはすべて、キリストにおいて到来したものの影にすぎません。この両者を組み合わせたり混ぜ合わせたりすることは、決してできません。

この手紙のテーマとその対比

古いもの、過ぎ去ったものと、キリストにおいて到来した新しいもの。優劣を表す順序のない概観です。

キリスト	モーセ
神の聖霊	律法
神の聖霊	肉、罪深い人間の本性
信仰、信頼、真実	律法の行い、行うこと
約束、神の確約	律法
神の祝福	のろい、律法違反の結果
自由	奴隷状態
成人した子としての身分	奴隷状態；監督下にある子どもの身分
相続財産	不確かさ
新しい創造；永遠のいのち	割礼／包皮
恵み	律法
教会の一致	排他的なユダヤ民族
水のバプテスマ	包皮の割礼
義認、無罪の宣告	断罪
福音、良い知らせ	律法
ゴルゴタの十字架	悪しき時代、肉
イサク	イシュマエル
上にあるエルサレム	地上のエルサレム、シナイ
新しい契約	古い契約
自由の女サラ	女奴隷ハガル、不自由な者

ガラテヤ人への手紙に見るクリスチャン

新約聖書のどの手紙も、それぞれの仕方で、神が私たち人間をご自分のもとに引き寄せられたとき、私たちを何にしてくださったかを描いています。私たちがどのように恵みを受け、今や恵みによって何になったのかを。それはまさに一つの「救いのカタログ」全体であり、それだけでも驚嘆へと導きます。永遠の神が私たちのためにこれほど多くのものを用意し、そのためにご自分の御子さえ与えてくださったなどと、いったい誰が考えたでしょうか。ここに挙げるのは、ガラテヤ人への手紙の中で、信じる者について何かを語っているすべての箇所です。神は、私たちがこれを信じ、その上に立ち、自分の生活の中で経験することを望んでおられます。**救いの豊かさのすべて**が、私たちに与えられました。今度は、それを日々の生活の中でごく実際的に自分のものとすることです。そしてそれを生き、体験することです。

- イエスは私たちの罪のためにご自分をささげられました（1:4）。
- 今の悪の世界（あるいは今の時代）から救い出された（1:4）
- キリスト・イエスにある自由（2:4、5:1）
- キリストを信じる信仰によって義と認められた（2:16〜17）
- 律法に対して死んだ（2:19）
- 神に対して生きる（2:19）
- キリストとともに十字架につけられた（2:19）
- キリストが信じる者のうちに生きておられる（2:20）
- キリストに愛されている（2:20）
- 御霊を受けた（3:2、5）
- 信仰によって祝福された者（3:9）
- 律法ののろいから贖い出された（3:13）

- 聖霊の約束を受けた（3:14）
- 律法によるのではなく、信仰によるいのち（3:21〜22）
- 信仰による神の子（3:26）
- 私たちはキリストを着ました（3:27）。
- 私たちはキリストのうちにいます（3:28、5:6）。
- 私たちはキリストのもの（キリストの所有）です（3:29、5:24）。
- 子とされるために贖い出された（4:5〜6）
- 御子の御霊が私たちの心のうちにおられます（4:6）。
- 神は私たちの愛する父です（4:6）。
- 神による相続人（4:7）
- キリストが私たちのうちに形づくられます（4:19）。
- 御霊によって（御霊から）生まれた（4:29）
- 神に召された（5:8、13）
- 私たちは御霊によって行動します（5:16、25）。
- 御霊が私たちを導かれます（5:18）。
- 私たちは御霊によって生きます（5:25）。
- 神の国の相続人（5:21）
- 永遠のいのち（復活において）（6:8）
- 信仰の家族（6:10）
- 世に対して十字架につけられた（6:14）
- 新しい創造（6:15）

あいさつ、呼びかけ、祝福の願い　1:1〜4

これを書いているのはパウロです。イエス・キリストから遣わされた者。キリストの使徒です。キリストは、ご自分の神であり父である方と心を一つにして、良い知らせ、**ご自分の福音**を私に託してくださいました。

私を遣わしたのは、どこかの人間でも、人間の集団でもありません。そうではなく、イエスを死者の中からよみがえらせ、神の御子、またメシアとして確証された父です。この方によって、**恵み**の時代が告げ知らされました。キリストにある**新しい創造**が打ち立てられました。

ここで私とともにいるすべての兄弟たちとともに、あなたがたにあいさつを送ります。私は彼らと、**ただ一つの福音**において一つにされています。ガラテヤのすべての教会にあいさつを送ります。

私たちの父なる神と、私たちの主イエス・キリストから、**恵み**と**平安**がありますように。あなたがたがどこにいても、何をしていても、神が日々あなたがたに守りと配慮と助けを与え、あなたがたを無事に保ってくださいますように！

赦しと解放――神がそれを望まれたから　1:4〜5

ガラテヤの皆さん、本当は何が問題なのか、私たちの確かさはどこにあるのか、私たちの贖い主の心からの願いは何なのかを、私たちが決して忘れないように、私は何よりも大切なことを最初に書きます――その方、私たちの主**イエスは、私たちの罪と過ちのために、私たちの悪行と違反のために、ご自分を与えてくださいました**。死に至るまで。無条件の愛から。自発的な、罪のないいけにえとして。罪のないこの方だけが、私たちの罪の大きな重荷を負い、十字架の死によってそれを永遠にこの世から取り除くことがおできになりました。そして、そのとおりにしてくださったのです！私たちは、自分の罪や過ちをなかったことにはできませんでした――律法の行いや、道徳的・宗教的な規律で何を成し遂げたとしても。**私たちに必要だったのはメシアです――ほかには何もいりません！**

こうしてキリストは私たちを救い出し、悪の世界から引き出してくださいました。私たちをこの世に縛りつけ、鎖でつないでいた罪を取り除くことによってです。キリストは、人が何も考えずに罪の中に生きている場所に、私たちを置いたままにはしたくありませんでした。そこで奴隷にされ、しかもそれに気づいてさえいない場所に。私たちの解放者は、**ご自分の愛の王国での新しい始まり**を私たちに与えてくださいました。キリストは私たちをご自分のものにしたかったのです。堕落した、神から遠く離れた世界から、キリストは私たちを解き放ってくださいました。まことの生ける神を知らない文化と社会から。神がかつてイスラエルをエジプトから解放されたように、今日も全世界を救うことが神のみこころです――私たちがユダヤ人の出であろうと、異邦人の出であろうと。

これが私たちの神であり父である方のみこころでした！決して手放されることのない、測り知れない救いのご計画です。だからこそ、今もとこしえまでも、考えうるかぎりのあらゆる仕方で、栄光と誉れがこの方にありますように！アーメン。

福音はただ一つしかない　1:6〜10

あなたがたが、これほど短い間に、ほかでもないイエス・キリストのこの恵みから離れてしまったことに、私は本当に驚いています。こんなことは、今まで私には不可能だと思えました。かつてのイスラエルと同じくらい思いがけないことです。イスラエルは、すばらしい救いを経験したにもかかわらず、あっという間に自分たちの神から離れてしまいました。モーセがシナイ山にいる間に、神をあっさりと金の子牛に取り替えてしまったのです。

あなたがたも同じです。父祖たちの神が、メシア・イエスにあってご自分の大いなる恵みへとあなたがたを召してくださったのに、あなたがたは今、**まったく福音とは言えない**福音にかかわってしまいました。キリストの恵みの、**侵すことのできない福音**をねじ曲げる何人かの人々によって、混乱させられているのです。

あなたがたに言います。誰があなたがたのところに来ようと、たとえそれがかつてシナイ山でのように御使いであっても、たとえ**私たち**がもう一度あなたがたのところに行って、初めとは違うことを宣べ伝えたとしても――**そのような者はのろわれよ！**その人は、イエス・キリストの福音が恵みによって私たちに与えてくれるものに、何のかかわりも持っていません。彼らは、その惑わすメッセージとともに滅びていくでしょう。彼らのものは何も残らないように。

私は前にも言いましたが、今もう一度言います。もし誰かがあなたがたのところに来て、私があなたがたに宣べ伝え、あなたがたが受け入れたものに反する別の福音を告げるなら、その者はのろわれよ！その者に向けられるのは、神のさばきと断罪以外の何ものでもありません。彼らは、神が私たちに与えてくださった最善のものを壊してしまうからです。彼らは人々をまっすぐ滅びへと導きます。**恵みから離れ、律法主義へと**。

福音がこれほど脅かされているときに、人々に気に入られるために、こんなにきつい言い方はしないほうがよいのでしょうか。私が喜ばせるべきなの

は、神おひとりではありませんか！もし私が人々に、たとえばあなたがたや、あの偽りの使者たちに気に入られようとしているなら、私はイエス・キリストのしもべではないでしょう。決して！

愛する兄弟姉妹の皆さん、私が宣べ伝えているこの福音は人間のものではないことを、知っておいてください。人間が考え出したり、思いついたりしたものではありません。なぜでしょうか。私はそれを人間から学んだのでも、受け取ったのでもないからです。**私はそれを、メシアであるイエス・キリストの啓示によって受けたのです**。キリストご自身から直接に。

私の歩みと回心――メシアの迫害者からメシアの使者へ 1:11〜16

ユダヤ人として、パリサイ人としての私の生き方について、あなたがたはきっと聞いていることでしょう。私は神の集まり、神の聖徒たちを、極限まで迫害し、滅ぼそうとしました。彼らを攻撃し、滅ぼすためなら、何でもしました。そもそも私は、ユダヤ教の中で出世していました。同年代の人々よりもはるかに多くの評価と支持を得ていました。私の名はどこでも認められていました。私は、父祖たちの言い伝えを極端なまでに厳格に守る熱心な者、熱心党員だという評判でした。どんな犠牲を払っても。私は、みだらなことをしたイスラエル人の男とミディアン人の女を皆の目の前で殺した、かつての祭司、エルアザルの子ピネハスのような、熱心な者でした。民数記25章にあるとおりです。

けれども神は、私の熱心が頂点に達したところで、私を止められました。ダマスコへの途上で。そこでも私は、クリスチャンの集まりを滅ぼそうとしていたのです。それを説明できるとすれば、ただこう言うほかありません。神は私が胎に宿ったときから、すでに私に目を留め、福音の奉仕のために私を定めておられたのです。恵みによって。まったく受けるに値しないのに。神は、ご自分の御子、メシアを私のうちに啓示することによって、私を止められました。私の心の目の前に。私の心と思いの中に、突然、神の御子、メシアが現れたのです。その方が、まばゆい光の中で私の前に立っておられました。その方が私に語りかけられました。そのことばが、一撃のうちに、私の敵意と、神の集まりを苦しめようとする私の熱心を終わらせました。**私はまったく正反対の者になるはずでした――キリストの福音の使者に。しかも諸国の民、ゴイーム（goyim）、異邦の民、非ユダヤ人、偶像を拝む者たちのための使者に。**

パウロの福音はエルサレムからではなく、天から直接、メシアから来た　1:17〜24

この劇的な体験のあと、私は何をしたでしょうか。普通ならするはずのこと、あるいは人々が期待したであろうことを、まさにしなかったのです。つまり、**エルサレム**へ行くことです。使徒たちと最初の教会のところへ行き、そこで自分のことを説明し、次の歩みについて指示を受けることです。

私はダマスコからただちに**アラビア**へ向かいました。カルメル山での大勝利のあと、恐れてイゼベルから逃げた、かつてのエリヤのように。そこで神に出会うために、はるか遠く、ホレブの山まで。私は神の臨在を求めました――人里離れた静けさの中で。私の心の奥底は、片づけられ、造り変えられ、新しくされなければなりませんでした。狂気じみた熱心が私をすっかり頑なにしていたので、神ご自身が私を変え、癒やさなければならなかったのです。キリストの栄光の福音と、恵みの及ぶ広さが、そこで、そのすばらしい細部に至るまで私に啓示されました。私は、それまで知らなかったキリストを見いだしたのです！聖書とトーラーは、この方について預言し、この方を証ししています。このキリストを、私はアラビアでも宣べ伝えました。

そこから私は、メシアとの出会いのあと神が私の目を開き、私の盲目を癒やしてくださった**ダマスコ**に戻りました。それからようやく、回心から三年後に、私は初めて**エルサレム**へ行きました。私は使徒たちの筆頭である**ペテロ**に会いたかったのです。15日間にわたって、私は彼をよく知ることができました。私たちは絶え間なく語り合いました。その頃までに、私には、ペテロがすぐそばで知っていたメシアについて、何千もの質問がありました。十二使徒のうち、ほかの誰にも会いませんでした。けれども、ペテロよりも長くメシアを知っていた人、すなわちメシアの兄弟ヤコブには会いました。彼は十二人のような使徒ではありませんでしたが、エルサレムの弟子たちの教会の指導者の一人でした。

私があなたがたに書いていることは、すべて真実です！

その後、エルサレムを離れてから、私は**シリアとキリキアの地方に行きました。私の古い故郷です。**

ユダヤにいる選ばれた人々、キリストにある聖徒たちは、私の顔を個人的には知りませんでした。私のエルサレム滞在は短すぎたのです。彼らはただ、こう聞いていただけでした――「かつて私たちを迫害し、苦しめた男が、今ではメシア・イエスへの信仰を宣べ伝え、広めている。かつて私たちもろとも根絶やしにしようとしていた、この信仰を」。彼らはそのことで神をほめたたえました。神が私に、このような回心と新しい創造の奇跡をなしてくださったからです。

二度目のエルサレム、ペテロ、ヤコブ、ヨハネのもとで 2:1〜10

それから14年たって、ようやく私は二度目に**エルサレム**に上りました。**バルナバ**と一緒に。私たちの忠実な助け手であった若い**テトス**も連れて行きました。エルサレムに行こうというのは、私の思いつきではありませんでした。行くようにと、上から私に示されたのです。

私はそこで、ユダヤ人と異邦人に宣べ伝えるためにキリストから受けた**福音**を、彼らに示しました。私の訪問が無駄にならないように、とりわけ、重んじられている人々、エルサレムの教会の指導者たちに示しました。

テトスは生まれながらのギリシア人で、割礼を受けていませんでしたが、エルサレムでも**割礼**を強いられることはありませんでした。使徒たちからも、ヤコブからも。

けれども、それを試みた者たちがいました。**使徒会議**の際に、兄弟たちの群れの中に**偽兄弟たちが忍び込んでいた**のです。偽りの兄弟たちで、彼らが考えていたことはただ一つでした。割礼を受けなくてよいという私たちの自由を、探り出そうとしていたのです。彼らは私たちをつけ狙い、テトスが割礼を受けているかどうかを突き止めて、受けさせようとしました。こうして彼らは、自分たちの誤った敬虔の考えに従って、私たちを律法のくびきと重荷の下に置こうとしたのです。

ついにテトスが割礼を受けていないことを突き止めると、彼らはそれを要求しました。予想どおりのことです。けれども私たちは、彼らの要求にきっぱりと反対し、それを退けました。**問題は真理、福音の核心だからです**。私たちはそれを守り抜きました。ガラテヤにいるあなたがたのためにも。福音は、割礼も律法の遵守も要求しません。

集まっていた指導者たち、つまりいわゆる重んじられている人々は、私が自分の福音を示したとき、それ以上何の要求も私に課しませんでした。まして

や、私が割礼を守り、それを教えるべきだなどとは言いませんでした。

彼らは、割礼を受けていない異邦人への福音が私に託されていることを認めたからです。しかもそれは、ペテロがユダヤ人、つまり割礼を受けた人々に福音を宣べ伝えるよう召されたのと同じ仕方で託されていたのです。ペテロを通してユダヤ人のために、ユダヤで働かれた同じ神が、私を通しても異邦人の間で同じように働かれたからです。

主の兄弟ヤコブと、二人の使徒ペテロとヨハネは、私に与えられた恵みを見たとき、私に**交わりの右手**を差し出しました。握手をもって彼らは、私とバルナバに、異邦人の間での奉仕こそ私たちの召命であることを確認してくれました。彼らがユダヤ人に仕えているのと同じように。**エルサレムの**指導者たちは、**私の奉仕と使徒職を認めた**のです。ですから彼らは、割礼を受けていない人々に割礼を受けるよう迫れ、とは要求しませんでした。彼らのただ一つの要求は、貧しい人々を忘れないように、ということでした。ほかには何もありません。そしてもちろん、私たちは喜んでそれを守ってきました。

アンティオキアでのペテロとパウロ――食卓の交わりを破ることが福音の心臓を壊す　2:11～14

しばらくして、ケファ、つまり使徒**ペテロ**が、バルナバと私が滞在していたアンティオキアにやって来ました。そこで**衝突**が起こりました。私が公然と、きっぱりと彼に立ち向かったからです。彼は自分の振る舞いによって、自分自身を責められるべき者にしていました。次のようなことが起こったのです――私たちは何人もの兄弟姉妹と一緒に食事をしていました。ペテロもその場にいました。ところが、主の兄弟ヤコブのもとから何人かの人々がエルサレムからやって来ると、ペテロは突然、私たちが異邦人のクリスチャンたちと持っていた食卓の交わりから身を引いてしまいました。律法と伝統の理由から、割礼を受けていない人々との食卓の交わりを拒んでいた、割礼を受けたこの到着した兄弟たちを恐れたからです。すると突然、ほかのユダヤ人たちも食卓の交わりから離れてペテロに倣い、彼のもとに集まりました。私の最も親しい信頼する友であり、ともに戦う仲間であるバルナバ、レビ人である彼までが、残念なことに、この偽善に引きずり込まれてしまったのです。彼らは、まるで異邦人のクリスチャンたちとは食卓の交わりなど持っていないかのように振る舞いました。割礼を受けたユダヤ人たちが、人を恐れるあまり、割礼を受けていない異邦人の兄弟たちから離れ、**それによって福音の真理を否定したのです**。その真理とはつまり、割礼なしに、モーセの律法なしに、ユダヤ教の言い伝えなしに、**神は異邦人をご自分の民として受け入れてくださる**ということです。彼らが福音の真理に従って行動していないのを見て、私はペテロと面と向かって対決し、このスキャンダルを公然と取り上げました。異邦人の弟子たちがモーセの律法を守らなければならないかどうかという問題は、つい先ごろエルサレムで、きっぱりと決着がついていたではありませんか。いいえ、異邦人は律法を守る必要はなかったのです。その場にいた皆の前で、私は彼に言いました――「あなたはユダヤ人なのに、ここで異邦人と食卓の交わりを持つことで、異邦人のように生きています。ところが今、あなたは彼らから離れて、ユダヤ人の信仰の兄弟たちの側

につくことで、異邦人にユダヤ教の言い伝えに従って生きるよう強いているのです。**異邦人は、あなたの振る舞いを、神の民に属するためにはユダヤ人として生きなければならない、という意味に受け取るしかありません**。それが、異邦人のクリスチャンに向けた、言葉によらないあなたのメッセージです。あなたの振る舞いは、はっきりとした合図になってしまうのです！しかも誤った合図に」。

義認は、すべての人にとって、ただキリストへの信仰から来る　2:15〜18

私たち、ペテロ、パウロ、イスラエルは、生まれながらのユダヤ人であり、それゆえ選ばれた神の民です。私たちは、律法もなく、神に選ばれてもいない異邦人のような罪人ではありません。けれども、そんなことは結局のところ、私たちに何の役にも立ちません。福音は別のことを語っています。人は律法の行いやユダヤ人としての生き方によって、神から義と宣告されるのではないことを、私たちは知っているではありませんか。それはただひとえに、イエス・キリストを信じる信仰によって起こるのです。私たちも、まさにこの信仰によって――割礼のような律法の行いによってではなく――義と認められるために、異邦人と同じようにメシアを信じました。そうしてはじめて、私たちは神の民に属するのです。**福音ははっきりしていて、妥協がありません――モーセの律法に従うことによって、つまり律法の行いによっては、地上のどんな人も、決して義と認められることはできません。神と和解することもできません。**ユダヤ的な、あるいはパリサイ的な敬虔によってもできません。神に対する私たちの関係、神との結びつきは、ただ信仰によってのみ正され、回復されるのです。

私たちユダヤ人が、キリストにあって義と認められるために全力を尽くすのなら、私たちが少しもまさっていないことは明らかではありませんか。割礼を受けた者としても、律法を持っている者としても。では、私たちが律法なしに義と認められるのなら、律法はどうでもよいのでしょうか。それとも、善悪はもはや問題ではなくなるのでしょうか。絶対にそうではありません！決して、決して。

私は律法とその要求を後にし、そうです、律法の体系全体を取り壊したのです。それがどのように起こったのかは、すぐあとで説明します。けれども、もし私が今それをもう一度建て直すなら（アンティオキアで、エルサレムから兄弟たちが来て、ユダヤ人クリスチャンがほかのクリスチャンから離れた

ときに起こったように）、私は違反者になってしまいます。キリストの律法と、キリストの福音を軽んじることになるでしょう。

福音――神の恵み、キリストの愛、その十字架、そして信仰　2:19～21

私、ユダヤ人パウロは、律法の正しい要求によって「死んだ」のです。律法が、いわば私を死へと追いやったのです。私は律法に違反した者なので、律法は私の死を要求しました。私には律法は守れません。完全に守ることなど、とうていできません。だから私は「死んだ」のです。言ってみれば、私は律法とその要求に対して、そして律法の正しい、罪に定めるのろいに対して死んだのです。けれども、奇跡が、転換が起こりました――私は今、神に対して生きているのです！私は自由に神に対して生き、神に従うことができます。どうしてそんなことがありうるのでしょうか。私はまだ生きていて、この手紙を書いているのに、それはどう説明できるのでしょうか。その理由はこうです――**私はキリストとともに「十字架につけられた」のです**。つまり、キリストの死において、霊的にキリストと一つにされているということです――十字架上のキリストの死は、私の死なのです。キリストの十字架において、違反者であり罪人であった私の古い、贖われていない人生は終わりました。**キリストの死において**、私のための死において。神がそれを可能にしてくださいました。神は、イエスの死と復活を、まるで本当に私自身の十字架刑**であり**復活であったかのように、いわば私に当てはめてくださったのです。

今、私は神に対して生きています――けれども、昔のサウロとしてではありません――私のうちに生きておられるのは、よみがえられたキリストなのです！**キリストが私の新しい存在です**。キリストが私の新しいあり方を決めておられます。キリストは、無罪を宣告され、義と認められた者としての私の人生の力です。

弱く、傷つき、死ぬべきこのからだにある私の存在を、私は信仰によって生きています。神の御子への揺るぎない信頼のうちに。この方だけが、私の信頼に値する方です。**この方が私を愛してくださったので、私はこの方だけに**

私の人生を賭けます。この方だけが、私をこれほど無条件に愛し、私のために、私の益のために、私の身代わりとして、死に至るまでご自分を与えてくださったのです。考えてもみてください――あなたを、私を、私たちすべてを、この方はご自分のいのちを代価として、無条件に愛してくださったのです。そうです、この方は私たちのゆえに――そして私たちのために――死なれたのです。

私は、古い契約の中にも、律法の中にさえも、すでに見て取ることのできる神の恵みを、無にはしません。けれども、もし神の前に通用する義、私たちを救い、新しいいのちを与える義が、律法の行いによって可能だとするなら、キリストは無駄に死なれたことになります。十字架上でのキリストの恐ろしい死は、無駄だったことになるでしょう。そうなれば福音は存在しないでしょう。**ですから、キリストにある神の恵みこそが、神のみこころにかなう者となるための、私たちの唯一の機会なのです。ここで律法はその無力さをさらけ出します――律法は贖うことができません！贖われるための助けにさえ、なることができないのです。**

神は十字架につけられたキリストにおいて、非ユダヤ人のガラテヤ人（ガリア人）にご自身を与えられる――律法においてではない　3:1～5

愚かなガラテヤ人よ、あなたがたはまるで催眠術にかけられたようです。まるであなたがたが、もうあなたがた自身ではないかのようです！私はあなたがたに、救い主イエスを伝えたではありませんか。**十字架につけられた方として、この方をあなたがたの目の前に描き出したのです――私たちのために死なれた方を。ご自分をささげることによって、この方はすべてを償い、私たちの罪をおおってくださいました。**これ以上に良いものを、私はあなたがたに届けることはできませんでした。これほど恵み深く、神はあなたがたに出会ってくださったのです。そしてあなたがたは、感謝して、信仰によってこの方を受け入れました。

ですから、あなたがたに一つだけ聞きたいのです。あなたがたが神の御霊を受けたのは、何によってだったのでしょうか。思い出してください！あなたがたの良い行いと律法への忠実さによってでしたか。それとも、私が宣べ伝えたことを信じたからでしたか。そんなに愚かであってはいけません。**あなたがたは聖霊によって、信仰のうちにイエスに従う歩みを始めました。それなのに今、自分の力と律法への忠実さで歩み続け、ゴールにたどり着こうというのですか。**本当に、肉的なものへ、宗教の外側の形へと逆戻りしたいのですか。信仰というすばらしい賜物とメシアを知ったことを、あなたがたは無駄に経験したのですか。福音のために受けたあなたがたの苦しみも含めて、すべてが無駄だったとは、私は想像したくもありません。でも、もしあなたがたが今、律法と割礼で歩み続けるなら、そういうことになってしまうのです。

あなたがたにすべてを与えてくださるのは神です！あなたがたに御霊を与え、あなたがたの間で奇跡を行ってくださる方です。あなたがたの生活に、家庭に、教会に、祝福に満ちた変化をもたらしてくださるのは、この方で

す。それは何によると思いますか。まさか、あなたがたの立派な敬虔によってですか。あなたがたが律法を守っているからですか。割礼を受けるからですか。あなたがたはそもそもユダヤ人ではなかったではありませんか！そして福音を信じたとき、あなたがたは律法とは何のかかわりもありませんでした！**ただ福音への、十字架につけられ、よみがえられたキリストへのあなたがたの信仰が、すべてを変えたのです。それによって、あなたがたに赦しと平和といのちがもたらされました。あなたがたのうちにおられる聖霊によって。**そのことは、今も変わっていないではありませんか。あなたがたの律法主義は、神の祝福を引き出すことはできませんし、この理解を台無しにしてしまいます！すべては、あなたがたの信仰に基づく、神の恵みの賜物であり続けるのです。

アブラハムは信仰によって義と認められた――私たちは、ただ信仰によって、その息子、娘なのです　3:6～9

あなたがたと同じように、アブラハムもすでに神を信じました。はるか昔のことです。彼は異邦人の中から出てきました――あなたがたと同じように。彼はイスラエルとユダヤ人の父祖です。神は彼を、その信仰のゆえに義と認められました。律法なしに！律法はまだまったく存在していなかったからです。割礼なしに。割礼はもっとあとになってから来たからです。大切だったのは信仰でした。アブラハムについての神の判決はこうです――アブラハムは義であり、私を無条件に信頼しているので、私と正しい関係にある。あなたがたが心において変えられたのと同じように、アブラハムもそれを経験しました。いったい当時、何が問題だったのでしょうか。アブラハムは、年老いても子孫がいないことに失望していました。聖書は創世記15章でこう伝えています。

「これらの出来事のあと、主のことばが幻のうちにアブラムに臨んだ――恐れるな、アブラムよ、わたし自身があなたの盾であり、あなたの報いは非常に大きい。2 アブラムは答えた――神である主よ、あなたは私に何をくださるのですか。私は子がないまま世を去ろうとしていて、私の家の相続人は、ダマスコのエリエゼルです。3 そしてアブラムは言った――ご覧ください、あなたは私に子孫を与えてくださいませんでしたから、私の家の奴隷が私の跡を継ぐことになります。4 しかし見よ、主のことばが彼に臨んだ――その者があなたの跡を継ぐのではなく、**あなた自身から生まれる子が、あなたの相続人となる**。5 主は彼を外に連れ出して言われた――さあ、天を見上げて、星を数えられるなら数えてみよ。そして彼に言われた――**あなたの子孫はこのようになる**。6 **彼は主を信じ、主はそれを彼の義と認められた**。」

彼は無条件に神に信頼しました。歴史の中で神が働かれる余地を明け渡し、あらゆる理性と人間の予想に逆らって、根源的な信頼をもって神の腕の中に身を委ねたのです。このように信じることこそが、規準であり模範です。こ

こからあなたがたは知ることができます。**彼のように信じる人は皆、アブラハムの息子、娘なのです。**

神は聖書の中で、異邦人がいつの日か信仰によって義と認められることを、アブラハムに予告されました。神は彼にこう言われたからです。**あなたにあって、すべての国々は祝福される。**

ですから、アブラハムのように信じる人は皆、祝福を受けます。そのとき、あなたがたは数えきれないアブラハムの子孫に加えられるのです。

律法はのろいをもたらし、信仰は無罪の宣告をもたらす――キリストは十字架の上でのろいを負われる　3:10～14

これとは対照的に、こうです――律法に向かう人は皆、律法によって義とされようとする人は皆、**律法ののろい**の下に身を置くことになります。神のことばははっきりしているからです――律法に書かれている**すべてのこと**にとどまらず、律法の求めることを行わない者は皆、のろわれる。律法の戒めの一つ一つすべてを守らなければなりません。戒めを一つだけ取り出すことはできないのです。

律法に基づいて、つまり律法の行いに基づいて義と宣告される人は、一人もいません。当時も、今も！聖書は――律法を伴う旧約聖書がずっと前からあったにもかかわらず――こう言います。**義人は、わたしを信じる信仰によって生きる**。キリストへの揺るぎない信頼と、キリストへの忠実とは、キリストが私のいのちであるということです。信仰によって義とされた者は生きるのです！**信仰のうちに生きるのです！**

律法の原理は、今も昔も信仰ではなく、行うこと、宗教的な業績です。これらのことを行う者は生きる、と書かれています。**律法に生きる人間は成果を出さなければならず、何一つただでは受け取れません**。律法は恵みを知りません。律法に身を委ねる人は、それを完全に満たす義務を負います！妥協も、混ぜ合わせも、中間の道もありません。律法とキリストへの信仰とは、相容れないのです。

信仰の人については、こう言えます――私たちを、キリストは十字架の死によって、破られた律法の死ののろいから贖い出してくださいました。私たちは律法に違反し、100パーセントどころか、とうてい律法を満たしてはいません。私たちが自由になり、生きることができるのは、ただ執り成す方、仲介者、あるいは弁護者によってだけです。私たちのために立ち、私たちが受けるべきものを自ら引き受けてくださる義なる方によってだけです。そして

イエスは、理解を絶することをなさいました――**私たちのために、のろいとならられたのです！**聖書が申命記21章23節で、木にかけられた者は皆のろわれている、と言っているからです。十字架の木の上で、死にゆくメシア、罪のない義なる方が、私たちの身代わりとして、死ののろいとならられたのです。悪しき人々によって十字架につけられ、殺されて。ですから私たちは、この方のいのちという代価によって買い取られたのです！それはすべての人に当てはまります――律法によって神の前に義とされようとするユダヤ人にも、異邦人にも。割礼を受けてしまったあなたがたガラテヤ人も、キリストによってのろいから解放されているのです。

受けて当然だったのろいからのこの比類のない買い戻しが、アブラハムへの約束への道を開きます――十字架につけられ、よみがえらされ、高く上げられたメシア・イエスによって、アブラハムに約束された祝福が、今やすべての国々にとって手に触れることのできる現実となるのです。キリストにあって、それはすべての民に及びます。それは、私たちすべて、ユダヤ人も異邦人も、**約束**、すなわち**聖霊**を受けるためでした。預言者イザヤ、エゼキエル、ヨエル、ゼカリヤがそう予告していたとおりです。新しいいのちの御霊。力の御霊。そして、神の新しい世界に吹く自由の御霊――新しい創造の息吹です。

神の約束は存続し、モーセの律法にまさる――律法は約束を無効にしない　3:15〜18

兄弟姉妹の皆さん、私は誰にでもはっきりわかるように話しているのです。ある人が遺言や契約を作り、それが法的に有効になったなら、それを無効にできるものは何もありません。追加条項でさえ、その法的効力を変えることはできません。

アブラハムは神から約束を受けました。彼の子孫にとって、それは有効で、異議を唱えることのできない遺言のようなものでした。ここで私がぜひ指摘しておきたいのは、厳密に言えば、約束は多くの子孫に、つまり、あなたがたガラテヤ人が含まれていない、アブラハムの直系の子孫と直接の血縁者だけに与えられたのではない、ということです。そうではなく、ただ一人の子孫、ただ一つの種に与えられたのです。一人の人格に。それが誰だか、あなたがたは知っていますか。**それはキリストです**。イサクにおいては、すべての約束が成就したとはとても言えないからです。

私があなたがたに言いたいのはこういうことです――神がアブラハムに対して立てた遺言は、430年後に来たモーセの律法によって解消されることはありません。そうです、約束は、すべての民に対する祝福の、神の確約と誓約は、存続し続けるのです。もし神がアブラハムに約束されたこの相続財産が律法から来るのなら、それはもはや約束ではありません。もう一度言います――神はそれを、約束によってアブラハムに与えられたのです。それはただ、アブラハムに対する神の確約なのです。

律法の意味、目的、そして終わり　3:19〜24

では律法には、いったいどんな意味があるのか、と問うのはもっともなことです。律法は何のために与えられたのでしょうか。トーラーの益は何なのでしょうか。トーラーは神の民にとって、言い表せないほどの祝福です。トーラーはまさに、**神がどのような方か**を示しているのですから。とりわけ、神を知らないほかの民の過ちからご自分の民を守るために、神がどんな良いことをしようとしておられるかを示しています。トーラーは**神の民を守る盾**でした。神の民の振る舞いには、規則が必要だったからです――そして制裁も。トーラーは戒めへの違反を明らかにします。警告を与えます。そして違反を罰します。見ようとさえすれば、トーラーはまた、私たちが皆、神のみこころに違反する者であることもはっきりと示しています。私たちは神の戒めを、完全に、すっかり守ることなど決してできません。

けれども律法は、限られた期間のためだけに与えられました――神の約束が定められていた**子孫**が世に来られるまでです。

律法、トーラーは、御使いたちの指示によってイスラエルの民に与えられました。モーセを仲介者として。けれども約束はまったく違います。アブラハムはそれを神から直接受けました。私が使徒の職と福音を、神から直接受けたのと同じように。仲介者なしに。唯一のまことの神ご自身が、今キリストにおいて成就したことを、アブラハムに保証されたのです。

では、ここから、律法は何らかの仕方で約束と張り合っている、と結論づけることができるでしょうか。いいえ、決してそうではありません。もしそうだとしても、それはただ次の条件のもとでだけです。もし本当にいのちを与えることのできる律法があったなら、義は律法を守ることから来るでしょう。そのときには――そのときにだけ――律法はいのちへの道となり、神の無条件の約束に代わるものとなるでしょう。

けれども、聖書の中に何が見えるでしょうか。すべての人が、ユダヤ人も異邦人も、律法の求めることを行っていない、ということです。彼らは、罪の

力に引き渡された違反者であることが暴かれます。罪深さは、律法によって紛れもなく明るみに出されました。それによって、すべての人に、自分たちにはどうしても約束が必要だということがはっきりします。そして実際に約束を受けることができるのだということも。すなわち、イエス・キリストへの信仰です。**ただ信じる者にだけ、太古からの約束が与えられるのです！**

キリストへのこの信仰が可能になる前、私たちは言ってみれば律法の学校にいました。律法の監督と保護の下にいたのです。いつの日か信じることができるようになるという目的をもって。この信仰が明らかにされる、その時に。そのとき信仰の道が、律法の下での私たちの囚われと見張りを、ついに終わらせることになっていました。律法は、いわば私たちの養育係となったのです。一方で、律法は私たちを守ってくれました。他方で、律法は、私たちがどれほどキリストを必要としているかも示しています――信仰によって私たちを義とし、神との和解した関係を与えてくださる解放者を。

解放者は信仰によって私たちを神の子とし、すべての人を区別なくキリストにあって一つにする　3:25～29

そして、神に感謝すべきことに、そのとおりになりました。メシアへの信仰が来て、メシアが私たちの生活に入って来られたとき、私たちは養育係を後にしました。律法の下での時は終わったのです。その目的はもう果たされたのですから。あなたがたは皆、もはや養育係の下にいる未成年者や生徒ではありません。そうではありません！**あなたがたは今や、信仰によって、成人した、一人前の神の息子、娘なのです！**あなたがたは家に帰って来たのです！父の心のもとに。父の腕の中に。今あなたがたを守っておられるのは父であって、もはや養育係である律法ではありません。

信じたばかりの頃のことを思い出してください。あのとき何が起こりましたか。あなたがたは主イエス・キリストの名によってバプテスマを受けました！多くの人が、あなたがたが水の中に沈められ、再び上がって来るのを見ました。そしてそのとき、あなたがたは**キリストを着たのです。衣のように**。今やキリストがあなたがたの生活の中身です。あなたがたは今、キリストのものです。あなたがたは今、クリスチャンとして知られています。あなたがたの生活の中に、メシアの姿が見て取れます。一人ひとりの中にも、またあなたがた全体の中にも。キリストがあなたがたのうちのどこに見て取れるのか、それについてはあとでまた触れます。

過ぎ去っていくこの世の秩序や区別、宗教的、社会的、身分的な境界や差別を、あなたがたはことごとく後にしました。バプテスマにおいてメシアに拠り頼み、この方を自分の主とした者は皆、この方にあって一つになったからです。人と人との間にもはや何の区別もない、一つの共同体です。身分、性別、地位、階層、人種、カースト、階級は、キリストにあってもはや何の意味も持ちません。キリストにあっては、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。**神にとって、またキリストにあって、私たちは皆一つなのです。**

ですから、もしあなたがたが、アブラハムのただ一人の子孫であるキリストとそのように結ばれているなら、あなたがたは確かにアブラハムの子孫となったのです。そしてあなたがたは約束された相続財産、すなわちアブラハムの祝福を受け継ぎます――信仰による義、神が父であってくださること、そして新しい創造を受け継ぐ者とされることです。もう一度言います――あなたがたをアブラハムの子とするのは割礼ではありません――それはただイエス・キリストにある救いなのです。

律法から神の息子、娘へ――あらゆる宗教の終わり　4:1〜7

相続人がまだ未成年で、成人しておらず一人前でもない間は、当時の文化と社会の秩序においては、奴隷や農奴と何の違いもありませんでした。しかも彼は――いわば待機の状態で――すべての財産の相続人であり、将来の主人であるにもかかわらずです。けれども、成人して一人前になるまでは、彼は後見人と管理人の下にいます。父が定めた時が来るまでは。

同じように、私たちユダヤ人も、この世の諸要素、つまり律法に、農奴や奴隷のように服従させられていました。そうです、その中に閉じ込められていたのです。この過ぎ去っていく、堕落した世界に属するもの、私たちを父と直接結びつける子としての身分の誉れと尊厳より低いものの中に、とらえられていたのです。

けれども、そのとき、天の父が定められた時が来ました。いわば「上から」定められた時です――**時が満ちたとき、神は私たちにご自分の御子を遣わされました**。約束されていたことが成就し、律法の時代の終わりが近づいたときに。天から遣わされた御子は、すべての栄光を捨てられました。ごく普通の女から生まれました。まったき人として。まことのユダヤ人として。モーセの律法の下に生まれ、その律法を完全に満たされました。それは、律法とその後見の下にいて、死ののろいの脅しの下で生きていた人々を、買い取るためでした。こうして御子は彼らを、子として、相続人としての完全な身分へと導き出されたのです。新しい出エジプトのように――古いものは過ぎ去りました。新しいものが生まれました。私たちは今ついに、神の息子、娘です。養子とされたのです。モーセの律法の保護の下にあった未成年の子どもから、成人した自由な、父の息子、娘とされたのです。神の介入がそれを可能にしました。御子が人となられたのは、私たち人間が父の息子、娘となるためでした。

あなたがたは今や皆、永遠なる方の息子、娘なので、神はご自分の御子の御霊を、あなたがたの心に遣わしてくださいました。神は私たちに、ご自分の御子の場所を、そうです、イエスの隣の場所を与えてくださったのです。この御霊は、私たちの霊とともに呼び求め、祈り、願います。私たちの心から、私たちの最も深いところから。私たちの存在のすべてから、本物の神の子どもだけが口にすることのできる、計り知れないことばがあふれ出てきます。**アバ、愛する父よ！**この御霊、私たちのうちにおられるキリストが、私たちの心を、神への深い信頼へと変えてくださいます。私たちがすべてを父に期待するとき、まさにそのとき、私たちは父に喜ばれるのです。大きな苦しみの中でこのことばを祈られたイエスと同じように。

ですから、恵みと信仰によって、あなたがたが何者になったのかを心に留め、悟ってください――あなたがたはもはや、モーセの律法の未成年の農奴ではありません。あなたがたは神の息子、娘です！そしてそれゆえ、アブラハムとともに相続する者です。メシアである私たちの主イエスによって。あなたがたは今、父がずっとあなたがたにいてほしいと願っておられた場所に、たどり着いたのです。

また奴隷になりたいのですか――あなたがたは自由を危険にさらし、すべてを失おうとしている！　4:8～11

この父なる神を知らなかった頃のことを、どうか一度思い出してください。あなたがたは偶像に仕えていました。それが神々だと思っていました。けれども、それは無に等しいものでした。人の手で造られたものでした。今やあなたがたは、唯一の、まことの、生ける神を知りました。そうです、まず先にあなたがたを知ってくださったのは、この方ではありませんか。そしてあなたがたをご自分のもとに召し、ご自分の子ども、相続人として受け入れてくださったのです。だからこそ、なおさら問わずにはいられません。よりによって今、どうしてあなたがたは、みじめで弱い諸要素と宗教的な考えに満ちた古い生活に、また戻ろうとするのですか。霊的に成人した息子、娘、相続人としては、そこにいることはできません。こうした考えや、イエスにおいて終わった宗教的慣習に、本当にもう一度従いたいのですか。今あなたがたは、特定の祝日や、月や、祭りの時期や、年を守っています。そもそもユダヤ人ではないのにです。びくびくしながら、自分の生活をユダヤの祭りの暦に合わせています。けれども、それは未成年として生きることです。まだ大人になっていない、小さな子どものように。こうしたものはどれも、私があなたがたにもたらしたものではありません。**それは、あなたがたを成人した神の息子、娘とする福音のメッセージではありません**。約束を受け継ぐ者とするメッセージではありません。あなたがたのために私が労したすべてが無駄になったのではないかと、私はひどく恐れています。

あの出会いのあとで、どうしてこんなことが起こりえたのか　4:12〜20

愛する兄弟姉妹の皆さん、私たちは互いによくわかり合っているではありませんか。お願いです、私たちはイエスのゆえに互いに結ばれているではありませんか。私があなたがたのところに来たときのことを、覚えていますか。私はからだの具合が悪かったのです。かなり限界に来ていました。タウルス山脈を越える長い徒歩の旅のあとで、私はすっかり疲れ果てていました。そのみじめな状態で、私はあなたがたに福音、良い知らせを宣べ伝えたのです。そしてあなたがたは？あなたがたはそのために私を軽蔑することも、私を嫌って地面につばを吐くこともしませんでした。そうされても当然だったのにです。けれども、あなたがたは私を、まるで神の御使いであるかのように受け入れてくれました。それどころか、まるでイエス・キリストご自身であるかのように。

あなたがたは、そのことをとても喜んでいました。**あなたがたはあのとき、驚き、喜びに圧倒されていました。けれども、その喜びはどこへ行ってしまったのですか。**あなたがたはすっかり心を動かされていたので、できることなら自分の目をえぐり出して、私に与えたいとさえ思ったほどでした。

私が今あなたがたを批判し、あなたがたに真実を書いているからといって、私が突然あなたがたの敵になったと、本当に思っているのですか。あなたがたが神の息子、娘になるためにと割礼を説いているあの人々は、良い意図を持っていません。彼らはあなたがたを、自分たちに依存させようとしているのです。キリストにではなく。あなたがたは彼らのトロフィーにされようとしています。あなたがたは、私パウロを敵とみなすように仕向けられています。そして彼らのためにこそ、熱心に骨を折るように。確かに、良いことのために骨を折るのは模範的なことです。あなたがたの熱心は、私がいないときにも表れています。それとも、そのときには反対側に寝返ってしまうので

すか。いつでも、福音の自由のうちにある、成人した神の息子、娘として生きてください！あの人々に対してもです！

私の子どもたち、私は、痛ましい産みの苦しみをもって、あなたがたをもう一度この世に産み出さなければならないかのように感じています。**あなたがたのうちにキリストが生まれるためです**。私が初めてあなたがたのところにいたときも、そうでした。キリストだけが――割礼でも律法でも宗教的な形式でもなく――あなたがたの心と生活の中に形づくられるべきなのです。あなたがたは、あんなに良い始まりをしていたではありませんか。今またあなたがたのところにいられるなら、私は何を差し出してもかまいません！そして面と向かって、ふさわしい言葉で、キリストとその自由のために、あなたがたを新たに勝ち取ることができたなら。手紙というものは、ときに厳しく、よそよそしく響くものです。宗教的形式主義の奴隷状態へと逆戻りしたあなたがたのことで、私はすっかり途方に暮れています。

アブラハムの二人の女と二人の息子――二つの契約、二つの山、そして二つのエルサレム　4:21～31

ガラテヤ人の皆さん、あなたがたは――ユダヤ人ではないのに――ユダヤ人のように律法の下で生きたいと思っていますが、律法の言うことを聞いていないのですか。モーセは第一の書で、アブラハムについてある出来事を伝えています。それは、あなたがたが何にかかわってしまったのかを、とてもよく示しています。アブラハムには二人の息子がいました。一人は女奴隷から生まれた子でした。もう一人は、奴隷ではなく自由の身であった妻から生まれた子でした。女奴隷の子は、信仰なしに、人間の力と努力によって生まれました。もう一人は――人間のあらゆる予想や可能性に反して――神の約束と確約によってこの世に生まれました。この二人の女は、私たちにとって比喩的な、予型的な意味を持っています。二人を比べてみてください。二人の女はそれぞれ、正式に結ばれた一つの契約を表しています。一つは**シナイ山**からのもので、そこでは人は律法の奴隷状態の中に生まれます。それを表しているのが女奴隷**ハガル**です。アラビアにある律法授与の山を表しています。それは今の**エルサレム**に相当し、イスラエルの民を表しています。メシアが十字架につけられたこのエルサレムは、その子どもたちとともに、モーセの律法の奴隷状態の中にあります。

けれども、もう一つのエルサレムがあります――上にあるエルサレム、**天のエルサレム**です。この天の都は、上から来るすべてのもの、すなわちキリスト、御霊、キリストの王国、そして新しい世界における目に見える神の臨在の真髄です。このエルサレムは、アブラハムの妻のように自由です。これが私たちの母です。偉大な預言者イザヤが、すでに54章でこう語っていました――「喜べ、子を産んだことのない不妊の女よ――歓声を上げて喜び叫べ、母となったことのない女よ！独りぼっちの女の子どもは、夫のある女の子どもよりも多くなるからだ」。

ガラテヤのクリスチャンの皆さん、あなたがたは皆、イサクのように、約束の子どもです！自由へと生まれた者、相続人となるために生まれた者です。

当時、自然に生まれた者、イシュマエルが、御霊によって生まれた者を迫害しました。そして私も、同じことをいつも経験しています。迫害を引き起こすのはユダヤ人たちです。異邦人のためにも来られた、十字架につけられたメシアを拒んでいるからです。

では、この状況について聖書は何と言っているでしょうか。妥協はありませんでした。そして今日もそうあるべきです。女奴隷とその子を宿営から追い出せ！彼らを追い払え。女奴隷の子は、自由の女サラの子とともに相続してはならないからだ。

イシュマエルは、服従と自分の業績の上に築かれた神との関係を表しています。イサクは、子としての生きた関係、私たちを愛する父の息子、娘としてくださった福音の核心を表しています。

まとめましょう、愛する兄弟姉妹の皆さん。私たちは女奴隷の子どもではなく、自由の女の子どもです。それがあなたがたにとって何を意味するのか、その違いがどれほど決定的なのかを、よく心に刻んでください。

あれか、これか――律法全体か、それともキリスト、恵み、自由か　5:1〜12

キリストは私たちのために来られました。自由をもたらしてくださいました。私たちを自由にするために来られたのです。そして、そのとおりにしてくださいました。この**キリストにある自由**の中にとどまりなさい。再び奴隷状態に引き込まれてはなりません。抵抗し、堅く立ちなさい。私パウロがあなたがたに言います――もしあなたがたが割礼を受けるなら、キリストはあなたがたに何の益にもなりません。キリストとその解放は、あなたがたが満たそうとしている律法とは何のかかわりもありません。あなたがたが律法を行おうとしても、それはあなたがたの助けにはならず、いや、助けになることなどできないのです。ついでに言えば、もしあなたがたが息子となり相続人となるために割礼を受けるなら、あなたがたは律法の**すべて**を守らなければなりません。そうなれば、割礼だけではとうてい足りません。割礼には、律法全体の下での生活が伴うのです。だまされてはなりません。安上がりな律法主義などありません。律法は割礼以上のことを要求するのです！

それがどこまで及ぶか、わかっていますか。もしあなたがたが律法によって義とされようとするなら、メシアであるキリストとのあなたがたのつながりは断ち切られ、切り離されてしまいます。そのとき、あなたがたは**神の恵みから落ちてしまった**のです。救命ボートから落ちるように。あなたがたを救い、義としてくださった恵み、私たちがその中に生きている恵みは、そのとき、あなたがたにはもう当てはまらなくなります。それにしても、なぜキリストの惜しみない恵みでは足りないのですか。なぜ自分自身に頼ろうとするのですか。

私たちは、解放し、照らしてくださる神の御霊を受けたではありませんか！その力によって私たちは信じています。その御霊によって私たちは、義の望みを待ち望んでいます。それが救いの完成です。私たちは、すべてが明らかにされ、私たちの義認が、イエスにある救いのすべてが、目に見えるものと

なる日を、喜びをもって待ち望んでいます。ですから、誰もがはっきりと理解すべきです。メシアにあっては、割礼を受けているかどうかは何の違いももたらしません。キリストに従う者にとって、割礼も無割礼も何の意味もありません。そこには、神に喜ばれるものは何もありません。ただ信仰だけが、イエスとの救いの関係だけが、大切なのです。神がキリストにおいてなさったこと、そして今日もなさっていることへの無条件の信頼だけが、私たちを神との正しい関係に置いてくれます。では、この信仰はどのようにして目に見えるものになるのでしょうか。互いへの積極的で、自分を忘れた愛によってです。そこにあなたがたは、あなたがたを義とし、神の子とする信仰を見て取ることができるのです。

あなたがたは、あんなに良いスタートを切り、信仰においてあんなに順調に歩んでいました。福音の真理に従い続けることを、いったい誰があなたがたに妨げ、ブレーキをかけたのですか。そのような説得は、あなたがたを信仰へと召してくださる方から出たものではありません。あなたがたがこの律法教師たちに耳を貸すなら、あなたがたの状況にぴったりの、印象深いたとえがあります。わずかなパン種が、こねた粉全体をふくらませるのです。

私は主イエス・キリストにあって、あなたがたもきっと同じように考えるようになると信頼しています。あなたがたを混乱させ、律法主義へと追いやる者たちは、神のさばきの場で、自分たちのしたことの責任を問われなければなりません。そして判決を受けるのです。何事もなかったかのように逃れることはできません。

もし私が、私のいないところで言われているように、本当に割礼を説いているのなら、なぜ私は今もユダヤ人たちから迫害されているのでしょうか。よく考えてみてください！そうなら、私が宣べ伝えている十字架のつまずきとスキャンダルは、もはや私を迫害する理由にはならないはずです。いいえ、私は割礼を説いてもいませんし、要求してもいません。そんなことは、思いつきもしません。

私に言わせれば、あなたがたを動揺させている人たちは、いっそのこと自分を去勢してしまえばよいのです。そうすれば彼らは、律法によれば（申命記

23章1節）、もはやイスラエルに、神の民に、まったく属さないことになります。

神の御霊の、自分を忘れた自由と実のうちに生きなさい　5:13〜24

もう一度言います。兄弟姉妹の皆さん、あなたがたは自由へと召されたのです。自己中心と偶像礼拝の奴隷状態からも、モーセの律法の奴隷状態からも！**あなたがたの自由は神のみこころです**。

けれども、まるで、これでようやく他人を犠牲にして、自分勝手に自分を実現できるかのように、この自由を誤解してはなりません。あるいは、隣人に配慮することなく自分を押し通せるかのように。自由とは、あなたがたが今や、愛をもって互いに仕え合うことができるほどに自由だ、ということなのです。そうすればあなたがたは、モーセの律法の本質的で最も大切なことさえも満たすことになります。**律法は、実に一つのことばで満たされるからです――「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」**。

もし割礼の戒めのほうが、律法が本当に重んじていることよりも大切だと言うのなら、互いにかみつき合い、食い合うことのないように気をつけなさい。割礼を受けた者と受けていない者との間のものも含め、あなたがたの間のあらゆる争いの中で、そういうことが起こりかねないのです。

聖霊の自由と力のうちに生きなさい。あなたがたは、自分の信仰によってこの御霊を受けたではありませんか。御霊は、あなたがたが互いにかかわり合う中で、キリストを知らなかった頃の古い生活の欲望に従わないよう、助けてくださいます。神の御霊、そうです、神ご自身の臨在が、あなたがたの生活の中に入って来て、古い、肉的な、生まれながらの、罪深い振る舞いに打ち勝ってくださるのです。割礼は、あなたがたが贖われていない振る舞いを脱ぎ捨てる助けにはなりません。もし割礼が問題になるとすれば、それは**あなたがたの心の割礼**です。それこそが大切なのであり、それは神の御霊によって起こるのです。

古い、肉的な、罪深い本性は、あなたがたのうちにおられる神の御霊に場所を与えようとしません。自分を実現し、自分を押し通そうとするのです。け

れども、私たちのうちにおられる神の御霊は、この戦いを引き受け、私たちのうちにキリストの姿を生み出そうとしておられます。ですから、「**御霊と肉**」の間の、古い生活と新しい生活の間の葛藤が、あなたがたの人生の一部であることを自覚していなさい。終わりの時まで。あなたがた一人ひとりの中で、けれども何よりも、あなたがたの間で。どちらの側も、あなたがたがもう一方の側の望むとおりに行動することを妨げようとします。ですから、気ままにふるまわず、罪深い傾向に従わず、神があなたがたのうちで働かせようとしておられることに、心を向けなさい。

もしあなたがたが神の御霊によって動かされ、霊感を与えられるなら、もし御霊があなたがたの生活を導き、治めておられるなら、あなたがたは律法の下にはいません。そのときあなたがたは、信仰によって、自由な神の息子、娘として生きているのです――あなたがたの父、アバとの交わりのうちに。

肉のわざ

私が「肉」とその欲望や傾向という言葉で何を言おうとしているのか、あなたがたが本当に理解できるように、ここで肉のわざをいくつか挙げましょう。これで全部というわけではまったくありません。これらは、あなたがた自身を、あなたがたの教会を、そしてすべての人との関係を、傷つけ、壊していきます。あなたがた自身の生活を吟味し、そこで自己中心のわざが習慣になっていないかを確かめなさい。そして、それを大目に見て、甘く自分を言い訳していないかを。むしろ、それを生活から追い出し、やめ、否み、私たちの主イエス・キリストの十字架のもとに持って行きなさい。

まず、性的な罪を挙げます。それは広く蔓延しています。それが歯止めも規準もなく行われるなら、その破壊的な作用は、抑制のない性に身を委ねるすべての人を――男も女も、若者も老人も――むしばみます。それが思いの中であれ、態度の中であれ、行いの中であれ。では、一つ一つ見ていきましょう。

淫らな行い：（ギリシア語 **porneia**）――不品行、結婚外の**あらゆる**性的行為、配偶者に対する不実。

汚れ：倒錯したこと、汚らわしいこと。結婚の内であれ外であれ、性の領域での恥知らずな行為、たとえば、女性を単なる欲望の対象におとしめること。

好色：節度のなさ、放縦、そして性的虐待。

偶像礼拝：創造主ではなく被造物を崇めること。神とそのみこころを、人生の第一の座から押しのけるすべてのもの。十戒の第一の戒めがこれを戒めています。ガラテヤの人々が解放された偶像崇拝。

魔法の薬草：（ギリシア語 pharmakeia）魔術、妖術、オカルト、心霊術の領域で、意識を変える薬物を用いること。人生を乗り切るために、現実から

の逃避として薬物を用いること。健康を害し、人生を破壊するあらゆる結果を伴います。

敵意：人々や民族集団に背を向け、憎むこと。

争い：不和、口げんか、争いを好む心。

そねみ：ねたみの一種。自己中心的で自分の利益ばかりを考える振る舞い、疑い深さ、強い喪失への恐れ。

憤り：激しい怒りの爆発、しばしばささいなことが原因の、人や物への抑えのきかない攻撃。

口論：争いごとや陰謀に向かう悪意ある傾向。

不和：一致が失われること。その結果として、分散、決裂、いさかい。

党派心と分派：セクト的な考え方、特別な教えや律法的な要求を主張し過度に強調すること、排他的で、視野を狭め、閉じこもっていくグループ形成。

ねたみ：他人に良いことがあるのを喜ばず、むしろ自分がそれを持ちたいと思う習慣。

殺人：人間を造られた神の主権の領域に対する、最悪の攻撃。

泥酔：過度の飲酒、酩酊状態。

遊興：飲み騒ぎや食べ騒ぎ、暴飲暴食、放蕩にふける罪深い生き方。

など。

愛するガラテヤの皆さん、私はすでに言いましたが、もう一度警告します。教会の中で、あなたがたの間でも、こうしたことを習慣的に行い、それが罪であることを認めようとしない人々は、**神の永遠の王国**に**何の相続分**も持たないでしょう。そうなれば、割礼を受けていれば永遠の相続財産が確保されると思うことも、まったく意味がありません。「肉」の道は、決して神の王国には行き着かないのです！

御霊の実

神である聖霊があなたがたのうちに生み出そうとしておられるものは、それとはまったく違います。御霊ご自身のご性質が、あなたがたのうちに見えるようになるべきなのです。ですから、ただ御霊によって、信仰のうちに育つ良い実を結ぶ生き方を選びなさい。

1. 愛：感情ではなく意志の決断である、神の、犠牲をいとわない愛。神と人への愛がなければ、クリスチャン生活においても、すべては無価値です（コリント人への手紙第一13章）。神がまず私たちを愛してくださったから、私たちは愛するのです。そしてそれによって、モーセの律法をも満たします。神の聖なる愛こそ最も偉大で、何よりも大切なものであり、だから私はそれを最初に挙げるのです。

2. 喜び：神が私たちにとってどんな方であるか、私たちと他の人々のために何をしてくださったか、今何をしておられるか、そして約束に従って何をしてくださるかについての、本物の、深い、たくましい喜び。共に味わう喜びでもあり、外側の条件（貧しさ、迫害、病気、苦しみ）に左右されない喜びです。

3. 平安：（ヘブル語でシャローム）争いがないというだけではなく、和解、心からの交わり、結びつき、全きこと、互いに歩み寄ること。

4. 寛容：他の人とのかかわりにおける忍耐と寛大さ、人々や状況を耐え忍び続ける心構え、受け身の、けれども粘り強い面における愛。草は引っぱっても早くは伸びません。

5. 親切：好意的で、いつも助けを惜しまず、思いやりのある態度、穏やかな性格、気前のよさ、愛の能動的な面。

6. 善意：心からの善良さ（親切と似ています）、正しく良いものを相手に与えること、善を行うこと。

7. 誠実：（信仰）——忠誠、信頼に足ること、まっすぐであることという徳、いつもご自分のことばに忠実で、約束を守られる神に倣うこと。

8. 柔和：穏やかさ、自己中心、過度な要求、うぬぼれの反対。自分の弱さと罪を自覚して、自分自身についてへりくだって考えること、他の人の問題や弱さへの思いやり。

9. 自制：自分を治めること、自己規律、自己管理、心の平衡、節度と中庸を生きること。

こうしたものがあなたがたのうちに見いだされるなら、あなたがたはどんな律法にも違反していないと確信してよいのです。この実のどれ一つとして、禁じられてはいません。それどころか、律法はこうした性質を要求することもなければ、生み出すこともありません。**これらすべての実、ただ一つの実は、一つのことばにまとめられます。イエス・キリストです。**この方が、御霊によってあなたがたのうちに生きておられます。ですから、あなたがたの生活を、ただこの方にお委ねしなさい。

イエス・キリストに属する人々、この方に信頼する人々は、信仰に至ったとき、決定的なことをしました。彼らは自分の古い生活を、すなわち罪深い情欲と破壊的な欲望を伴う肉を、**イエス・キリストの十字架**のもとに持って行ったのです。彼らは古い、罪深い生活から意識して背を向け、十字架へと、イエス・キリストへと向き直りました。この古い生活は、十字架にしか値しません。私たちのためのイエスの身代わりの死において、それは断罪され、こうして終わらせられたのです。それはイエスの死の中で死にました。あなたがたは、この十字架の死刑判決を、自分に対するものとして受け入れたのです。古い本性（肉）から、古い本性のために生きることは、あなたがたにとって過去のものです。

御霊に蒔く――互いのためにそこにいること、愛を生きること、惜しまず与えること、思い上がらないこと　5:25〜6:10

神の御霊は私たちに新しいいのちを与えてくださいました。私たちを新しい創造としてくださいました。私たちの存在は新しいのです。それは神の御手の中にあります。ですから今、それにふさわしく生きなさい。御霊に従いなさい！御霊の足跡に！共に、互いに一つとなって。**来たるべきいのちを、今すでに、この場所で生きなさい**。

互いの間で、互いの前で、むなしい名声と栄誉を求めるのはやめましょう。互いに挑発し合い、張り合うのを、もういいかげんにやめましょう！互いにねたみ合うのをやめましょう！こうしたことはみな、十字架でその終わりを迎えたではありませんか！

愛する兄弟姉妹の皆さん、誰でも**過ち**を犯し、つまずくことがあります。誰でも、罪や違反に不意を突かれることがあります。誰でも、何が敬虔で神を恐れることなのかについて、誤った見方を追いかけてしまうことがあります。けれども、御霊の人であるあなたがた、御霊のいのちを生きているあなたがたは、隣人がよろめいているのを見たら、その人を助け起こしなさい。その人を正し、立て直すことによって。その人に、その過ちを指摘してあげなさい。とりわけ、本人がそれに気づいていないときに。御霊の足跡へと戻れるよう、助けてあげなさい。けれども、見下すような、あるいは高慢な批評家としてではなく、柔和な心で、慎重に。同じことは、あなたがた誰にでも起こりうるではありませんか。気をつけていなさい！あなたがたも同じ誘惑にさらされていて、倒れたりつまずいたりする危険の中にいるのです。そのとき、自分自身の罪と過ちについて、自分を厳しく吟味しなさい。こうしたことを一度も経験したことのない人など、おそらく一人もいないでしょう。**まさにそのときこそ、私たちは互いを必要としているのです！**

キリストが進んで十字架と私たちの罪を負ってくださったように、互いのために重荷を負い合いましょう。私たちの弱さと、絶えず誘惑に陥りやすいことの重荷を。教会は、まだ罪を犯す者たちの集まりでもあります。そして、絶えず罪に脅かされている集まりです。また、あなたがたが互いに支え合い、一緒に担うべき重荷もあります――病気、経済的な困難、迫害、孤独、不安、絶望、過重な負担、そのほか多くのもの。

こうしてあなたがたは律法を満たすのです。**キリストの律法を！**受け身でいること、隣人への無関心、何もしないことは、神の御霊から来るものではありません。「時間がない」、「興味がない」、「意味がない」、「どうせ望みがない」などと言うことは、御霊の行進の隊列においては選択肢になりません。過ちや罪があっても、私たちは互いに愛し続けます！私たちの信仰は、まさに行動する愛の中で働き、その真価を示すのですから。

自分は何か特別な者だ、あるいは欠点のない者だ、あるいは他の人など必要としない者だと思っている人がいるなら、その人は自分自身を欺いています。ですから、各自が自分自身を吟味し、自分が何を成し遂げているかを見なさい。**しかも神の前で**。他の人と比べてではありません。私たちの心をご存じの神こそ、唯一の規準です。それが、自己欺瞞や思い上がりから身を守る最善の方法です。そのうえで、そのときになってもまだそうしたいと思うのであれば、自分の行いを誇ることもできるでしょう。私たちが神の前に立つあの日には、一人ひとりが自分自身について責任を負うことになります。

誰もが教会の中で、ただ人に押しつけることのできない自分の務めと責任を持っています。**御霊における生活は、いつも交わりの中での生活です！**

蒔くことと刈り取ること

あなたがたに良い指導と教えを与えてくれる人たちを支えなさい。言葉だけでなく、行いをもって、また経済的な手段をもって。霊的なものを受けているあなたがたが、物質的なものをお返しする用意がないのなら、福音における深く良い指導がありえないとしても、驚いてはなりません。**あなたがたの教師、指導者、牧者たちを支えなさい！**

あなたがたが互いにどう振る舞うかなど、どうでもよいことだとは、決して思ってはなりません。思い違いをしてはいけません、神をごまかすことはできないのです。すべての人に、**蒔くことと刈り取ることという自然の原理**が当てはまります。**人は自分が蒔いたものを、いつか刈り取ることになります**。私たちの行い、考え、振る舞いには、必ず結果が伴います。いつの日か、私たちはその結果に向き合うことになります。地に蒔かれた種から何かが育ち、芽を出すのと同じくらい確かに。自分の人生の畑に、古い、贖われていないものを蒔く人は、**滅び**を刈り取ることになります。結果を伴わずには行うことのできない肉のわざとはどんなものか、私はたった今あなたがたに書きました。自分の人生と資源を、自分の時間と力とお金を、自分のために、人生の数えきれない楽しみや気晴らしにつぎ込む人は、いつの日か、そのすべてが滅びていくのだと振り返ることになるでしょう。

けれども、自分の人生の畑に御霊を蒔く人は、神とその御霊から**永遠のいのち**を刈り取ります。もうすぐ、神の新しい創造の中で、神の永遠の王国の中で。ですから、善を行いましょう――それは無駄にはなりません。刈り入れの時が来るのですから、疲れてしまわないようにしましょう。大きな収穫祭が私たちを待っています。決して終わることのない収穫祭が。けれども、善を行うことをやめてはなりません。それが無駄に思えるときも、すぐには感謝の反応が返ってこないときも。ですから、まだ時間と機会があるうちに、**すべての人**に対して善を行いましょう。神の心と開かれた手をもって、助けを必要としているすべての人に出会い、その人々を祝福しましょう。キリス

トにある兄弟姉妹と一つに結ばれている、信じる者たちの教会から始めなさい。そこでこそ、あなたがたは日々、御霊に蒔くことができるのです。

神の介入――ゴルゴタの十字架が違いをもたらし、終わりであると同時に始まりでもある　6:11～18

ここまでは字の上手な愛する兄弟に口述して書いてもらったこの手紙の結びとして、私は自分の手であなたがたに書いています。大きな字なので、あなたがたにもわかるでしょう。私が詳しく説明してきたことを、短い言葉でまとめ、要点をはっきりさせましょう。

あなたがたに無意味な割礼を迫っている人々は、ただ人によく見られたい、自分たちのかたくなな使命をうまく果たしたい、と思っているだけです。それがうまくいけば、キリストの十字架のゆえに同胞のユダヤ人から迫害される心配をしなくてすむのです。**彼らにとっては、キリストの十字架よりも割礼のほうが大切なのです。彼らの目的は、あなたがたがユダヤ人になることなのです。**

けれども、割礼を受けているこの偽りの宣教者たち自身が、律法を守っていません。彼らは、あなたがたの割礼を誇ることができるという名声を求めているのです。まるで頭の皮をはいで掲げ、勝利を祝おうとしているかのように。

けれども私パウロにとって、追い求める価値があるのは、ただ**十字架を誇ること**だけです。十字架は、人間のあらゆる自己顕示欲に線を引いて消してしまいます。人の前での、人からの名声や栄誉には、私は関心がありません。私たちの主イエス・キリストの十字架こそ、私たちの唯一の希望です――そうです、中心であり、私たちが立っている岩です。私にとってそれは、こういうことを意味します。この世とはもうおしまいです！この世の宗教的、律法的な諸要素とも、偶像に満ちた生き方とも、もうおしまいです。かつてユダヤ教の中で持っていた、私自身の生き方とも。そこで、新しい世界が生まれたのです。死ではなく、いのちこそが、十字架の目的であり希望です！のろいの木は、私たちにとって、いのちの木となるのです。

そして私自身も、この古い、滅びゆく世界に対して、この十字架の上で死にました。私はもはやその世界には属していません。その世界は、もはや私に何も与えることができません。もはや何も要求することができません。**十字架によって、もう後戻りはありません！**

割礼を受けているかどうかは、十字架によって過去のものとなりました。十字架は新しい創造の始まりです。人が何をしなければならないかではなく、神が何をなさり、何を造られたかです。キリストにある新しい存在と安らぎです。新しい時代が始まりました。今大切なのは、ただ**信仰と恵みと、解放をもたらすキリストの律法**だけです。

新しい創造というこの規準に従って生きる人々は皆、神の祝福の下に、神の平和とあわれみの下にあります。彼らこそ、まことの神のイスラエルです。そうです、新しい神のイスラエル、信仰によるアブラハムの子どもたちです。割礼は、あなたがたを奴隷状態にある古いエルサレムに、律法の下にあるイスラエルに結びつけてしまいます。

ユダヤ教へ逆戻りするような脱線で、これ以上私を煩わせないでください！私はこのからだに、迫害の焼き印を帯びています。イエスがご自分の十字架の傷を帯びておられるように。私の傷跡ははっきりと語っています。私が宣べ伝えている十字架のことばを語っているのです。

私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みが、日々あなたがたの思いの中にありますように。**その恵みの上に建て、その恵みに望みを置き、その恵みによって生きなさい。**

アーメン。

結びに

これを読みながら、神があなたに語りかけておられるのを感じていただけたことを、心から願っています。神がどのように励まし、教え、そしてまた、神から出たものではなく、それゆえ私たちを損なうあらゆるものについて警告してくださるかを。

神があなたについて、またあなたに直接語ってくださったすべての良いことを、神に感謝してください。

ご質問があれば、私たちにお便りください：hj-ronsdorf@t-online.de

新約聖書のほかのテキストは、www.hans-joerg-ronsdorf.de でご覧いただけます。

さらにいくつか大切なヒントを

聖書を読んでください。できれば定期的に。

ほかの人と一緒に聖書を読んでください――そして、それについて語り合ってください。

神がご自分のことばをあなたにとって生きたものとしてくださるように祈ってください――まるで神があなたに直接語りかけておられるかのように。

テキストを声に出して、二回続けて読んでください。

テキストに次の問いを投げかけてみてください

このテキストに、あなたならどんな見出しをつけますか。

このテキストは神とイエスについて何を語っていますか。

このテキストは人間について何を語っていますか。

このテキストから私たちは何を学びますか。

私たちは何をすべきでしょうか。

このみことばは私たちをどのように励ましていますか。

また集まったときには、皆さんの経験や体験について話し合ってください。

イエス・キリストを愛し、あがめ、聖書を大切にし、読み、真剣に受け止めているクリスチャンとの接点と交わりを求めてください。